**登場人物**

レヴィン
ハルカ
リヒト
フリット
アイ

草原で走り回っている二人

レヴィン「おい、ハルカ！待て、待ってくれ！」

ハルカ「ダメよ！止めたかったら追いついてみなさい！」

レヴィン「こら！そっちは危ないって！」

段差に引っかかる
ハルカ「きゃっ！」

段差に引っかかる
レヴィン「ハルカっ！うあ！」

二人でしばらく転げ落ちる
レヴィン「わあぁぁぁ！」
ハルカ「きゃああぁぁ！」

二人で顔を見合わせ笑いあう
レヴィン「はは」
レヴィン・ハルカ「あはははははは！」

朝の食卓にて
ハルカ「ねえ、レヴィン、昨日とってきてくれた野いちごでジャムを作ったの。食べてみて。」

レヴィン「うん、じゃあもらうね。・・・美味しい！ハルカは料理の天才だな！」

ハルカ「ありがと、じゃあレヴィンはお世辞の天才ね！」

レヴィン「なんだそれは！そんなこというやつは・・・こうしてやる！」

ハルカ「や、やめて・・・あは、はははは！！もう、仕返し！」

レヴィン「こら、そこは、あはははは！やめろ！この！」

笑いあう２人を１０秒ほど

ベッドで二人一緒に寝ている。
ハルカ「ねえ、レヴィン、私たち、ここでずっと二人で暮らして行こうね。」

レヴィン「ああ、俺が食べ物をとってきてハルカが家のことをして・・・幸せだ、ハルカ」

ハルカ「レヴィン・・・抱きしめてちょうだい」

レヴィン「ああ・・・」

レヴィンの夢
アイ「リット・・・」

レヴィン「う・・・」

アイ「ねえ、こっちよ・・・」

レヴィン「誰・・・だ・・・」

レヴィンの肩をゆらす。
ハルカ「レヴィン、レヴィン」

レヴィン「う・・・あれ？」

ハルカ「大丈夫？すごくうなされてたから・・・」

レヴィン「ああ、ありがとう、変な夢を見てたような気がする・・・」

ハルカ「そっか・・・ごめんね、起こしちゃって。」

台詞のあとキスをする。
レヴィン「とんでもない、おやすみ、ハルカ」

ハルカ「じゃ、そろそろ行こう、レヴィン」

レヴィン「ああ」

ハルカ「ねえ、レヴィン、身体の調子はどう？」

レヴィン「なんだ、今からお医者に行くのにハルカが診てくれるのかい？」

ハルカ「もう！茶化さないで！ねえ、どうなの？」

レヴィン「もちろん、見たとおり僕は健康そのものさ。なにも問題ないよ。」

ハルカ「よかった・・・早く、先生のところにも行かなくてよくなるといいね。」

レヴィン「ああ」

病院
リヒト「診察はこれで終わりです。お疲れ様でした。
レヴィンさん、どうでしょうか、何かご自身で気になることなどありませんか？」

レヴィン「いえ、先生の仰ったとおり、頭の傷跡はもうほとんど痛みませんし、体調も全く。
あ、気になることと言えば、あるはあるんですけど・・・」

リヒト「どうかされましたか？」

レヴィン「いや！なんだか、最近変な夢を見るんですよね・・・」

リヒト「変な夢・・・ですか？」

レヴィン「はい、誰かから呼ばれる夢なんです。でもそれは僕の名前ではなくて・・・
でも、なんだか呼んでいる人のことを僕は知っているような気がするんですよねぇ。
あ、すみません、本当に関係のないことをベラベラと！」

リヒト「・・・いえ。
もし、またなにか変わったことがあればご報告ください。また２週間後に会いましょう。お大事に。」

レヴィン「お待たせ、ハルカ。」

ハルカ「ね、大丈夫だった？」

レヴィン「ああ、全く問題ないってさ。」

ハルカ「あぁ！よかった・・・！」

レヴィン「ハルカはおおげさなんだから・・・さ、帰ろう！」

ハルカ「うん！」

病院で一人呟く
リヒト「やっぱり・・・そうなのか・・・」

レヴィンの夢
アイ「ねえ、私のこと好き？」

レヴィン「う・・・あ・・・」

アイ「ダメ、もう一回言って・・・」

レヴィン「ア・・・イ？」

レヴィンを揺り起こす
ハルカ「レヴィン！大丈夫！？」

レヴィン「う・・・なに？」

ハルカ「レヴィン、顔真っ青よ、水もってくるね。」

レヴィン「ああ・・・」

水をカップに入れて持ってくる
ハルカ「はい、どうぞ。」

水を少しのみ
レヴィン「うん、落ち着いた、ごめん、また変な夢を見ていたんだ・・・」

ハルカ「いつだって私が傍にいるから、安心して、ね。」

レヴィン「ハルカ、ありがとう・・・」

次の日の朝
ハルカ「ねえ、レヴィン、私今日、山の麓まで水を汲みに行ってくるわ。」

レヴィン「え、それなら僕が・・・」

ハルカ「だーめ、昨日よく眠れなかったんでしょ、顔色悪いもの。
今日はゆっくり休んでなさい。」

レヴィン「あ・・・うん、わかった、ありがとう。」

ハルカ「そのかわり今日はレヴィンが料理当番よ、楽しみにしてるんだから。」

レヴィン「はは、久しぶりだな、よーし、腕を振るうか！」

ハルカ「その調子！それじゃ行ってくるね。夕方には帰ってくるから。」

レヴィン「うん、気をつけてね。」

ハルカ「あ、レヴィン。」

レヴィン「ん、どうしたの？」

ハルカからキスをする。
ハルカ「愛してるわ。」

レヴィン「僕もだ。」

ハルカ「行ってきます！」

昼になり料理のことで思案している。
レヴィン「うーん、このシチューにはどうしてもハーブがほしいんだよなぁ・・・」

レヴィン「うん、悩んでたって仕方ない、ハルカが帰ってくるまで時間があるし、
採りに行くか！」

レヴィン「あれ、先生のとこに誰か来てる？
島の人間は滅多なことじゃ・・・」

レヴィンM どうしてかわからない、僕の心は高波のように荒れ、
凪のように静かに音を立てず歩いていた。

ハルカ「彼は言ったんです、あの女の名前を、夢の中で」

リヒト「やはりか・・・嫌な予感はしていた。」

ハルカ「どうして？彼の脳よ、彼女の事を覚えているわけないじゃない！」

リヒト「脳じゃない、身体が覚えているんだ。」

ハルカ「そんな・・・」

リヒト「実際に、目を移植した患者の瞼に知らない女性が
写り続け、その女性は目の持ち主の妻だった、という話もあったらしい。
彼の場合は目だけではない、身体全体がフリットのものだ。尚更だろう」

ハルカ「先生・・・私、どうしたら！」

リヒト「落ち着くんだ、まだどうなるかわからないだろう。」」

レヴィンM　何を二人は話しているのだろう。
フリット？誰だそれは？
扉を挟んで聞こえる声は明瞭に聞こえてくる。

ハルカ「だけど、もし思い出してしまったら、私は・・・」

リヒト「どうしようもないだろう。」

ハルカ「・・・方法はあるわ。」

リヒト「・・・それ以上はだめだ、ハルカ。」

ハルカ「なんでよ！もう引き返せないもの！あなただってそうじゃない！」

リヒト「私は悔いているんだ、自分の過ちに、人の命を弄んだことに・・・」

ハルカ「だめ、だめよ！私はレヴィンがいなければだめなの！だから同じことをすればいいじゃない！」

リヒト「君はまた人を殺せというか！正気の沙汰じゃない！」

ハルカ「狂っていたっていい！止めたって無駄よ。もう、引き返せないもの。」

リヒト「私は・・・駄目だ、あの女の顔が毎晩夢に出るんだ、殺さないでくれ、殺さないでくれと！」

ハルカ「臆病者！だったら今度は私が止めをさしてあげるわよ！」

レヴィンM　僕のこと…なのか？
何故人を殺すのだ？
殺すというのは・・・誰をだ？

ハルカ「あなたは私の言うとおりにするしかないはずよ。
私たちは共犯じゃない。」

リヒト「まだ彼がフリットの記憶を
取り戻すかどうかはわからないじゃないか！」

レヴィンM　フリット・・・なぜだろう、その名前を僕は知っている気がする。
知っているだけではない・・・なにか大切なことが・・・う！
頭が・・・頭が痛い・・・！

暗転、３か月前の回想
リヒト「ハルカ、よく聞いてくれ。彼はまもなく息を引取る。」

ハルカ「そんな･･･嘘です、昨日だって、私とずっと一緒にいると約束してくれたのに･･･！」

リヒト「君の辛い気持ちはわかる。・・・それで君に相談があるんだ。
彼と一緒にいる方法が、実は一つだけあるんだよ。」

ハルカ「え・・・先生、教えてください！」

リヒト「ただ、これは君にとっても、彼にとっても辛い決断だ。
それでもいいかい？」

ハルカ「はい、彼と一緒に生きていけるのなら、どんなことだって。」

リヒト「わかった。彼の身体は間もなく死ぬ。だから代わりを用意するんだよ。」

ハルカ「え・・・？」

リヒト「彼の身体を冷凍保存する、その間に君は人を調達してくるんだ。
若い女と彼によく似た男性がいい。できるだけ早くにだ。」

アイ「フリット、ねえ、雨強くなってきたよ。」

フリット「ああ、どこか雨宿りできるところを探さなきゃ。
　　ごめんな、アイ。こんな天気になっちまって。」

アイ「いいの、フリットと旅行できるなんて、私はとても楽しいよ。
あ、あれ！民家じゃない？」

フリット「本当だ！」

ノックをして
フリット「すみません！すみませーん！」

扉を開き
ハルカ「はい。」

アイ「私たち、旅行でこの島に来ていて…」

フリット「申し訳ないのですが、少し雨宿りさせて頂けないでしょうか。」

ハルカ「ええ、とりあえず中へ。」

フリット「ありがとうございます！」

アイ「すみません、助かります。」

ハルカ「こんな雨、滅多にないのに、運が悪かったですね。」

フリット「いやあ、参りましたよ、晴れていたのに急に降りだすものだから！
実は私たち都のものでして、船で来ていたんです。本当に助かりました。」

アイ「失礼ですけど、この島に住んでいる方は少ないのですか？」

フリット「おい、アイ！」

ハルカ「ふふふ、いいんですよ。
ここは、荒れ果てた土壌ばかりですし、私たちを除けば４、５人ですね。
お茶をどうぞ。」

フリット「頂きます。
私たちってことは、旦那さんがいらっしゃるんですか？」

ハルカ「いえ、まだ結婚はしていないんです。」

フリット「ええ！？なんてもったいない！俺ならすぐにでも結婚・・・」

アイ「フリット！」

ハルカ「ふふふ・・・」

フリット「ははは・・・あ、あれ？」

ハルカ「どうかされました？」

倒れる
フリット「いや、疲れてるのかな・・・体が・・・あ・・・」

倒れる
アイ「フリット？う・・・な・・・なん、で・・・」

目を覚ますが身体が動かない。
フリット「う・・・あ・・・」

リヒト「よくやりました、ハルカ。もう戻れませんよ、いいですか？」

ハルカ「はい、以前話したとおりです。」

リヒト「わかりました。」

アイをナイフで刺し殺す
アイ「あ・・・フリ・・・ト・・・」

リヒト「運が、悪かったんですよ・・・」

フリット「ア・・・アイ・・・」

アイの髪を鉈で千切り、ナイフで心臓を取り出す。
リヒト「若い女の頭髪と新鮮な心臓、これで完成するはず・・・」

恐怖と怒りが入り混じる
フリット「や・・・やめろ・・・」

注射をする。
リヒト「君はまだしばらく寝ていなさい。」

気を失う。
フリット「うっ」

アイの一部を槽の中に放り込み、液体が透明に変わる。
リヒト「できた、できたぞ・・・！誰もなし得る事ができなかった霊薬の精製を！この私が！！」

リヒト「フリット、君は人類始まって以来の不老不死の身体になれるんだ。
だが、もうじき君の身体ではなくなる。」

リヒト「通常、人間は脳の移植に耐えられないが、不老不死となった君の体はどんな移植手術にも耐えられる。
そうだよ、君の脳を他人のものと入れ替える。それは、君が君でなくなることを意味する。
これが成功すれば私は霊薬を作り上げたことを証明し、脳移植を唯一行った研究者となる。」

リヒト「次に目覚めたとき、君はレヴィンとして存在するのだ。」

暗転、現実に戻る。

レヴィン「あ・・・」

レヴィンM　全て、思い出した。
この身体はフリットの身体だ。
とにかくここから離れないと・・・
僕は家に帰り、ハーブの入っていないシチューを作った。

ハルカ「ただいま！ごめんね、遅くなっちゃって！」

レヴィン「ああ、おかえり、ハルカ。シチューができているから、早く着替えておいで。」

ハルカ「やったあ、うん、急いで着替える！」

ハルカ「やっぱり、レヴィンが作った料理は美味しいね！」

レヴィン「ハーブは入ってないけどね、僕のはたまにつくるからそう感じるんだよ。
　　ハルカの手料理にはかなわない。」

ハルカ「毎日食べていて、飽きない？」

レヴィン「ああ、ハルカの料理は世界一美味しいから、死ぬまで食ってやる。」

ハルカ「ふふ、じゃあ毎日パスタでも怒らないでね。」

レヴィン「え、それは勘弁してくれよ！」

ハルカ「ふふふ、冗談よ！」

レヴィン「ハルカ」

ハルカ「なに？」

レヴィン「愛している、他に何もいらない。」

ハルカ「レヴィン・・・」

レヴィン「うっ・・・」

ハルカ「レヴィン！？どうしたの！」

アイＭ　フリット・・・フリットオォォォ！

レヴィン「う、うあああああ！！」

ナイフでハルカを刺す

ハルカ「か・・・あ・・・」

ハルカ倒れる

レヴィン「はぁ、はぁ、はぁ・・・うっ・・・うう・・・ううう」

レヴィン独白「僕は君を愛している。
ハルカ、君以外の誰も愛したりしない。
・・・またいつか君を恨むことになったとしても。」

ハルカを引きずり病院を訪れる。
レヴィン「先生。」

リヒト「レヴィンか、どうしたんだい・・・あ、ハ、ハルカ・・・！」

レヴィン「・・・貴方にはもう一度、働いてもらいます。」